
妖怪徒然草

山崎聰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪徒然草

【著者名】

山崎聰

N4889U

【あらすじ】

妖怪を祓う家系に生まれながら、その能力が弱い僕・藤坂 浩太。そんな僕と猫又・やすと時々、前世。…僕の前世って…。

0話 始まり

「りょ……「つ。」

誰かの低い声が聞こえる。

名前を呼んでいる。

その声の主を探すために、まわりを見渡す。

そこには、黒髪の長髪をそのままに、黒い着流しを着ている男性がいた。その男性の黄色の瞳が優しく細められる。

「や……す。」

「やす？」

僕の目の前には、天井がつつる。

「コウタ浩太^{カウタ}。御飯よ。」

「分かつた^カ。」

僕の名前は、フジサカ藤坂^{フジサカ}浩太^{カウタ}。高校一年生の男だ。

そして、今さつき、僕を呼んだのは、姉さん。フジサカ藤坂^{フジサカ}浩菜^{ヒロナ}。僕より七つ上だ。

「そういうや、浩太、今日は、父さんと母さんの命日でしょ?」
「ああ……」

姉さんは「」飯を僕に渡しながら、言つた。

父さんも母さんは、十一年前の今日、二月二十八日に亡くなつた。

僕が五歳、姉さんが十一歳の時の話だ。

「私は今日いけないから、ちよつとお墓参りに行つてくれる?」

「ああ、いいよ。お線香とかある?」

「向こうで買つてくれる?」

「分かつた。」

姉さんはあまり話がない。
いや、このままだと、語弊
がある。仕事をする前はあまり話がない。仕事の後は、むしろ、僕
を猫可愛がりする。それは、イライラするほどだ。

「じゃあ、行つてくるわね。」

「いっつらつしゃい。」

姉さんは静かに家を出た。

父さんと母さんの記憶は僕にはない。五歳のころだったっていつの
もあるのかも知れないけど、顔も出てこない。知つているのは写真
に映る笑顔だけだ。

『ガタツ』

物音がある。

家柄だろうか、そのせいであいつらは、よく入つてくれる。姉さんは
入れなこよつとしてこらつて言つてたの。

「今日は、藤坂の坊ちゃんしかいないんですか?」

後ろから声が聞こえ、振り向くと、ぽんやりと女の子が見える。

「…雨女か？」

「せいいか～い。だけど、いい加減、名前を覚えてくれると嬉しいな
」。

「えっと…麗だっけ？」

「そ～。にしても、主様に似てるな～。坊ちゃんは。」

「雨女…じやなかつた麗の主様つてさ。」

「澪さまです。」

澪といつのは、母さんの名前だ。

「藤坂の当主さんがいたら、言いたかったことがあるんだけどな～。」

「…僕じゃ力不足か？」

「そういう意味じゃあつませんよ。じゃあ、お伝えて下さい。力の強
い奴がこの辺をうろつきだした、と。」

「分かった。わざわざ知らせてくれて、ありがとな。」

「いえいえ、では、坊ちゃん、また。」

雨女はゆっくりと消えていった。

雨女　雨を呼ぶ女。

今は普通に使われる言葉だが、もともとの意味は、妖怪の意味を持
つ。

麗　　彼女は、妖怪なのだ。

僕たち人間は、妖怪たちは共存をしている。共存と言つても、お

互いにただ存在を知つていいだけだ。

そんな曖昧な関係だからこそ、悪意を持つ妖怪はいる。そのため、力が強い人間が妖怪を祓つたこと。それが祓魔師の始まりらしい。

優秀な祓魔師の家系として知られるのが、僕らの藤坂家など。全部で二十家系ほどだろうか。

雨女ほどの中級妖怪は、僕にはぼんやりと見ることができた。しかし、小物妖怪などは見ることができない。九十九神とか、その辺の妖怪は。

僕も力が強かつたら、姉さんのお手伝いができるのにね。願つてもかなわないことをかなつてしまつんだ。

僕が通う高校は、そういう家系の人と自分だけが力の強い人とかいろいろいる。僕が力は弱いのに、あの高校に通つているのは、ほとんど家系のおかげだ。

いつそのこと、僕なんか産まれなくてもよかつたんじゃないかな？

何もできない僕。

「墓参りに行こう。」

これ以上考えていたら、きっと…最悪の決断をするかもしれないからだ。

「やつと見つけた。」

黒い猫は浩太を見ながら言ひ。

〇話 始まり（後書き）

説明ばかりですこません。

1話 黒猫

僕は山にいた。

雨女が言つたことをビリしても気になつたからだ。

「…にしても、雨女が言つ力が強い奴つて。」

中級の雨女が強いといふことは、僕にもはつきりと見えるだひつ。どんな妖怪かと全然わからないけど、僕にもはつきりと見ることができるのなら、見つけやすい。

「…お前は、りょうなのか？」

その声に振り返ると、一匹の黒猫がいるだけだった。黒い毛に、黄色い目。

…声が聞こえるなんて、氣のせいだつたか？

もう一度、じつと見つめると、黒猫の異変に気付いた。

…しつぽが一股 猫又か。

「猫又だよな。りょうって誰のこと言つてんだ？」

「…覚えてるわけがないか。」

「お前、このあたりにでたつていう力が強い奴か？」

「私は力が強いかもな。」

早めに気付くべきだつた。

僕に見えるということは、こいつ、相当、力が強い。まさか、会えるとは思つていなかつたので、なにも装備をしてこなかつた。

やべえな 。

「お前は 。

「ん、何か来るぞ。」

「は。」

猫又がいきなり言った。

瞬間、目の前に腕のようなものが現れた。手と言つても人間と同じようなサイズではない。太さは木の幹ほどあるのではないか?

「い。」

そして、掌が現れた瞬間、ガツと捕まれる。

「お前、祓えないのか?」

「つるせつえ。」

僕の言葉に猫又は、首を振るよつなしぐさをする。

そして、僕をつかんだまま、掌は動き出す。その動きによつて、やつと、その腕の持ち主の顔を拝むことができた。

白く長い髪、顔には、深いしわが刻まれている。それだけを見れば、ただのおばあさんだが、大きさは、見たことないほどの大きさだった。　山姥だ。こんなにも大きなものは、初めて見た。

何とかしなくては、このまま食べられてしまう。姉さんを独りにしてしまつ。

「小物が、散れ。」

瞬間、僕を掴んでいた掌がゆるくなり、地面に落とされる。

「ゴホッ。」

「お前は、りようなのか？」

だから、りょうて誰なんだよ。

僕が言つても、猫又は何も言わない。

「助けてくれたのは、ありがとう。」

名は及ばない

僕にもはつきり見えたといふことは、あの山姥は中々大物だ。にも
関わらず、この猫又は小物と言つた。こいつは……。

「……私は、猫又だ。それ以下でも、それ以上でもない。だが、お前には名前で呼ばれていた。」

卷之二

「つまら ふしげな、ふしき闇に うるさい」

考えてみてもでこない……。

「つまう

「お前、記憶が。」

「いや、ちがくて。僕は、あいつを祓つひとを考えなへけやいけないんだ。」

「無理だよ、お前にば。」

「ハルカ。姉さんをヒヅキせるわけにはいかないんだ。」

「姉さん?」

「いいから、とにかく、助けてありがとな。」

僕は、急いでその場から立ち去った。

山姥のことだけでも収穫だ。姉さんにも伝えなくては。

姉さんは、まだ帰つてこない。だつたら、あとでいいかな…。

「つょい…。」

りょうつて…。あの猫又が言つたことじやないか…。

「やあ。」

やす　　自分の口が動くことが分かる。

やす

「やすって、あの猫又のことが?」

「浩太さま、浩菜さまが。」

その声に驚きながら、すぐさま飛び起きる。

「姉さん、大丈夫？」

「ええ、大丈夫よ、浩太。」

姉さんは力なく笑う。

昨日の仕事でしごじつたらしい。医者の話によると、そこまでの重症ではないらしい。一週間ほどの入院ですむらしい。

「無茶しすぎだよ、姉さん。」

「そう？ 浩太も無茶しちゃダメよ。」

「分かってるよ。学校もないから、そんなことに関わらないから。」

雨女からの忠告を伝えるわけにはいかなかつた。少しくらい休ませてあげたいじゃないか。だから、姉さんの代わりに僕が。

昨日みたぐ、無防備に行くわけにはいかない。
学校の指定の袴を着て、日本刀を横にさす。

「おや、また来たのか？」

「…猫又か。」

「御名答。」

猫又はうれしそうに「ひひひひひひ」と言つてくる。

「ちよつと待て。えっと……やすだつけか？」

その言葉に少し驚いたような猫又。

「会つてゐるのか。」

「あ、思い出したのか?」

「いいや。でもさ、人間だつたはずなんだけど……。」

「それは、私が化けた姿だ。」

「すげーな。やつぱ、力が強いのは……。」

「じゃなくて、お願いがあるんだよ。昨日の山姥をどうにか、見つけてほしいんだけど。」

「お前、その服を着てどうこいつもりなんだ?」

「どうこいつもりつて、祓うつもりだけビ?」

その瞬間、猫又が少し驚いたような感じをする。

「祓う…か。りょうとは違うんだな。」

「だから、僕はりょうさんじゃないって。」

「…かもな。まあ、手伝つてやつ。私の名前を聞いたからな。」

「あ、あ?」

「そんな怒ることないだろ?」

猫又はこいつを見ながら歩き出す。

「はあ…。」

「ま、来るぞ。」

「いきなりかい。」

驚きながらも周りを見る。

「手伝つてやるから。」

「え？ いいのか。」

「ああ。」

そんな会話をしながら、後ろで気配を感じる。

「まよい。」

「ん、少しほ敏感なんだな。」

「驚くなよ、手伝ってくれんだろ！？」

「ああ。」

その瞬間、猫又の近くから煙が立つ。

大きな猫のようなものが現れる。その田は、黄色く、しつぽは一股に分かれていた。まさか…。

「さつさと、終わらせればいい。」

「やすなのか…。」

「正解だ。」

振り向けば、山姥の掌がすぐ近くにあった。

まよい。

そのとき、やすの口がその腕にかみつく。

「ウオオオオオオオオオオオ。」

このときしかないと、僕はたかをくへつて、日本刀を鞘から抜き出す。

日本刀を横にし、九字をきる。

「臨兵闘者皆陣裂在前。」

すると、日本刀は、少しだが、青い色を帯びた。どうやら、僕の力を
を帶びてくれたようだ。
きりかからうと、山姥に近づく。

「まよい。」

頭上でやすの声が聞こえる。少しあせつたよくな声。
その瞬間、いきなり体をふつとばされる。

「いでえ。」

「大丈夫か？」

その言葉がなぜか、遠くに聞こえる。

まよい…僕、死ぬのか…？

僕が死んだら、姉さんは…。

続く

2話 懐古

「おい、大丈夫か。」

小僧は、私の声にも反応がない。
今度は、目の前で失うのか
?

「大丈夫。」

その声には聞き覚えがあった。

先ほどまで、聞いていた小僧の声よりも高く、何百年と待ち焦がれた声だ。 私が探し求めていた彼女がそこにはいた。

「お前…りょう…。」

私は呆気にとられて、小僧を見る。

小僧が着ていた水色の袴。髪の色も小僧と同じ薄茶。しかし、瞳の色は違った。薄い黄緑色のような色だった瞳は、黒色に変わっていた。

「久しいな、やす。」

「りょうなんだな。」

「ああ。」

そう笑つてから、りょうは、目の前の山姥をにらみつける。

「…最近の妖怪つて、気性荒いのね。」

「お前のこりとは違つて、な。」

そう言つと、じょは、ゆりへつと、刀を持ちなおした。

「使うのか？」

「ええ。」

しかし、その顔には迷いがあることが、私にはわかつた。

「私が追い払つてもいいぞ。」

「いえ、いいの。これは私の問題だから。」

「…。」

その言葉に私は何も言えなかつた。
まぎれもない小僧が、彼女　りょう自身なのだと、実感した。

「はあ――――――。」

りょうは刀を構え、走り出す。山姥は、自分に向かうりょうの存在に気づいたらしく、りょうに手をのばしてきた。

「やす。」

「ああ。」

何も言わずとも分かる。

今、りょうとまた、戦えてゐることに私は喜びを感じる。

私は、山姥の腕にかみつく。

そして、かみついている私の体をかけあがっていく。

「臨兵闘者皆陣裂在前。」

りょうは、山姥に向かつて、九字を切る。すると、山姥は、少し動きを鈍くした。その瞬間、りょうの持っている刀は、紅く燃え上がる。

「さすがだな。」

「褒め言葉ね、あんがと。」

そして、山姥にきりかかる。

「うがああああああああああああああああ。」

「闇にはびこるものよ、我が名において、闇の世界へ帰りたまえ。」

瞬間、山姥は、白い光になつて、天へと向かつた。

「りょう。」

私は人間の姿に変化し、りょうに近づく。

「やすの人間バージョンだ。」

「りょう…。」

にっこり笑つたりょうは、あの頃から、変わりがなかつた。

「あのね、やす。」めんね。」

「どうした？」

「いきなりいなくなつて。」

彼女は、私の前から、姿を消した。

「りょう、なんで、いなくなつたんだ。私の前から。」

「…それは言えない。」

「つよひ…。」

ゆづくりとじようの頬に触れる。

しかし、体はりょうではなく、小僧だった。せわり心地は違った。

「ねえ、やす。」

「ん?」

「この子は、私であつて、私ではないのよ。」

その言葉に驚いて、りょうの顔をじっと見つめる。
りょうは、真剣な目をしていた。

私はきっと知っていた。

小僧が彼女ではないことを

知つて、目をそらしていた。

「分かつてるよ。」

「なら、余計よ。この子の前から、いなくなつて。」

「なんでだ。」

「これからは、彼を守る』となるわよ？あなたとの契約はひとつ
に破棄されてくる。血肉に生きていいくのよ。」

りょうはゆづくつと下を見る。

「私は守るよ。お前を小僧を。」

やつ語りつど、りょうは顔をあげて囁つた。

「ありがと。」

「つよひ…。」

「あなたは変わらないわね。」

そつまつて笑つたりょひの顔は、懐かしきものだった。

「…田が覚めたか？小僧。」

「やすか…つて、山姥は、どうしたんだ？」

僕が問うと、やすはやれやれと首を振る。

「お前が倒したんだよ。」

「は？」

「お前どこつか、りょうか。」

…意味が分からぬ。

「まあ、あとで、説明してもらつか…。」

「これからは、私がお前を助けてやる。」

「は？ いきなり何、言つてんだ？」

「私はお前と契約を結ぶと言つてゐるんだよ。」

契約…。

「はあー!？」

僕がそう言つと、猫のままなのに、やすがにやりと笑つた気がした。

なんだかんだあつたが、僕はゆっくじと家に帰つた。

やすの説明をどうするか、とか。

「にしても、僕は、あんたの探してた人だつたんだな。」

「ああ……。」

やすは、僕の数歩先を歩きながらそつけなく答える。

「…ん?」

どこからか、小さい話し声が聞こえる。

「藤坂んとこのお嬢は、傷を負つたらしこぞ。」

…なんの声だ?

周りを見渡して気づいた。

人間の人差し指くらいの大きさの小人がそこにいた。

「なんじゅ…こじゅ。」

「ん？ どうかしたか？」

「なあ、これって、妖怪か？」

「ああ、そうだが…お前その妖怪見ることできるのか？」

驚きつつ、やは聞ぐ。

「力が強い人の目だつたりする？」

「もしかしたら、りょうの力の残りがお前にその光景を見せているのかもな。」

「…そつか。」

もしかしたら、このまま行けば、姉さんの力になれるのではないだろうか。

しかし、その願いはかなわず、一時間後くらいには、いつもの僕の目に戻っていた。

春休み編
•

完

また、憂鬱な日々が始まった。

「浩太、遅刻するわよ。」

姉さんの声で、突き付けられる現実。
そつ、学校が始まったのだ。

「おはよー、浩太。」

「おはよ、木原。」

あぐびを噛み殺しながら、後ろからやつてきた少女に言ひつ。
彼女の名前は、木原 恵理。僕の幼馴染で、クラスメイトだ。明る
すぎるのがたまに、傷だつたりする。

色素の少し薄い黒髪を、ポニーtailにして、灰色の瞳をしている。

「昔みたいに恵理って呼んでいいんだよ~?」
「うるせえ。」

幼馴染だからこそ、僕は木原のことを下の名前で呼んでいた。だが、一応、今は高校生だし、恥ずかしいといふこともあり、苗字で呼んでいる。

「…進級したつてのに、メンツは変わらないんだよな…。」

「何それ、嫌なの？」

「変わったことと言えば、なんだ？」

「えっと、教室が変わって、実践の授業が少し増えて……。」

木原は、指折りながら数える。

「一つだけか？」

「かも……あたしのスカートが短くなつた感じ？」

スカートを広げてみせる。
確かに、短くなつてている……。

前まで、校則に触れないように、膝を隠れる長さだったにもかかわらず、今は、見えるか見えないかといった感じだ。

僕らの通つている学園の高等部の制服は、ほとんどスースーのやうなものだ。黒いジャケットに、男子はズボン、女子はスカート。もちろん、黒色だ。そして、ネクタイとリボンをつけるのだ。それは、組ごとに違う……まあ、そんなことは置いといて。

夏はもっと、かわいらしが……今は関係ない。

「……あと、なんか、あつたような？」
「なんだ？」

話していくうちに自分たちは、教室についた。

「おはよ、浩太、きはらつち。」

「「あつ……。」」

クラスメイトを見て、二人とも同時に思いだす。僕らのネクタイとリボンは、色が変わったのだ。

「…やつぱり、やつたか、二人とも。」

くくくと笑うのは、れいだ。

れいは、かんざき れいいち 神埼玲一と黙つて、真面目なようで、真面目じゃないやつだ。短髪の黒髪で、青い瞳で、眼鏡をかけている。

「玲一の大正解。」

みのるは、ぱちぱちと拍手した。

みのるは、やまさと みのる 山里実と黙つて、肩ぐらいの長さの濃い茶色の髪を一つ結びにして、薄茶色の瞳だ。

「…メールしてくれよ。」

「いや、ある意味で楽しみにしてたからな。」

「きはらっちと浩太はちゃんと笑いが分かつてるな。」

「好きでやつたわけじやないわ。」

僕と木原の胸にあるネクタイとリボンの色は、一年一組を表すオレンジではなく、一年一組を表す青緑色だ。

二人に散々笑われる。

…ふと、クラスの人数が一人足りないことに気がつく。

「あれ？澤海さんと藤原は？」

「二人とも始業式に代表として、発表するし、明日の入学式のこともでしょ？」

「まあ、今日が入学式じゃなくてよかつたな、一年生の一人。」

「…や…やといつみのるに僕と木原は、見合つてから、同時に黙つ。

「「「つるさいこーー。」」

「んで、恵理と浩太は、やつたわけ？」

「藤原まで、言つのか。」

僕は、机に突っ伏しながら、言つた。

「大体ね～、いい加減、なれなさいよ、中一の時からでしょ？」

「つるさいなあ～、春奈。」

たまらず、恵理が言い返す。

藤原 春奈。^{ふじわら はるな} 茶髪のショートカット、薄オレンジ色の瞳は、明るい印象を与える。本人は、それを上回るほど明るさを持っているが……。

「小学生の時は、違ったから、仕方ないですよ。」

控えめな敬語、ふんわりとした声色だが、どこか、芯の強さを感じる声だ。

僕は、この人が苦手だ。

この人とは、澤海 美代子。^{さわみ みよこ} 腰くらいの長さの黒髪をみつあみにして、黒い瞳に、白い肌。文学少女と言つたいでたちだ。

「美代子、それって、私たちが小学生みたいっこ?」

「ナニコレ! じやないですよ。」

あわてて否定する澤海さん。

こんな光景だつて、見なれたはずなのに。なぜ、僕は彼女のことが苦手なのだろう。

「こしても、このメンツで、11年目か。」

れいがしみじみと囁く。

「そうですね。」

「なんか、寂しいよな。一年後にはもう卒業してるんだぜ。」

「山ちゃん、おじさんみたいなこと言つなよ。」

「みなさん、大学には行かないんですか?」

澤海さんが言つた言葉に、みんな言葉に詰まる。

「俺は行くよ。父ちゃんがそつとつし。」

「私もです。」

二人は僕らとの違い。
澤海さんとれいが言つ。

「僕は行かないかも。」

「あたしたちも行かないと思つ。ねえ、恵理。」

「うん。浩太は?」

「僕も行かないと思つ。」

「僕も行かないと思つ。」

「一人と僕らの違い… 次期当主か、次期当主でないか… と言つたところか。

「そんなことより、ベランダに黒猫さんがいらっしゃいますよ。」

その言葉で、四人ともバタバタと立ち上がり、ベランダに向かつた。

「黒猫…ねえ。」

春休みのことを思い出す。

いろいろあつて、僕は今、黒猫 猫又と契約している。契約

それは、祓魔師が妖怪に力を借りるために使うことだ。契約した妖怪は式と呼ばれている。

「浩太、お前、ちゃんと勉強してるのか？」

…ああ、聞きたくない声だ。さきほど言つた猫又の声にそつくりす
ぎて、腹が…。

「はあ…？」

僕は驚いて、立ちあがる。

「なんだ。浩太の知り合いの猫又なの？」

恵理が残念そうに言つ。

そんな恵理を放置して、猫又を近くに捕まえる。

「お前、なんで、いるんだよ。」

「…心配なのでね。」

お前が心配なのは、僕の中の…つまらひだりうが。

「言いたいことは山々だが、帰れ。」

「こじても、この猫又チャン、力が強いですね。」

澤海さんが珍しそうに呟く。

澤海さんのほうを見て、猫又が皿を細めるような…。

「まあ、帰れ。」

「いやだね。」

「帰れって。」

しばらく、押し問答が続いた。その結果、やつてきた担任の近藤先生に怒鳴られるということになった。

「なあ。」「なんだよ、やす。」

僕は今まで我慢していた言葉を言った。^{なまえ}

「何故、お前を呼ばなかつた。」

「契約してゐるつてばれるからだろ。」

「…まあ、いー。どうせ、呼ばれるだらう。」

やすは、ふんと鼻をなぐす。

「…あの澤海とこつ女。つよひの氣配がわざかだが、感じられた。」

「澤海さんが？」

僕の言葉にやすは答へずやすたすたと歩き出す。

よく分かんないな…。

「と、いうわけで、頑張ってね。」

担任である近藤先生がにっこり笑つて言ひ。

「去年も言ったんですけど、やる必要あります？」

「何を？」

「補助です。」

澤海さんが言ひ。

僕たちが通うこの高校には、普通の教科、祓魔の座学、そして、実践授業がある。

そして、毎年、入学したての一年生を一年生が補助することとが授業の一環としてある。しかし、もともと、中学校でもやってくる実践を補助する意味はないのでは…ともつぱりの評判だ。

「…あるんじゃないかな？」

隣でやつとつを見守つてこた神崎先生も口をだす。一年一組の担任だ。

「おじさん…じゃなくて、神崎先生も必要だと想ひますか？」

この通り、神崎先生はれいの叔父なのである。

「まあ、やめしかないでしょ？」

藤原が腕まくりをしながら、言へ。

「…藤原がやる気だすと、大変なことになりますだよな。」
「確かに。」

僕と木原は、ボソリとつぶやく。

「竹下 美雪です。」

「妹の小雪です。」

「双子なの？」

「そうです。」

澤海さんの質問に笑顔でこたえるのは、妹ちゃんとこいつ小雪ちゃんだ。

髪の長さの違いをのぞけば、身長や顔、スタイルまで映し鏡のようにそっくりだった。

お姉ちゃんの美雪ちゃんは、髪を肩こりまでのストレートをそのままに。小雪ちゃんは、髪を一つ結びにしていた。真っ黒な黒髪に、真っ黒な瞳は綺麗だった。

そして…。

「藤坂 瑞菜です。浩にいへ。」

「一二一二」と笑いながら、手を振るのは、僕のことこだ。同じ学校に入るために、一緒に登校しようだの、なんだの言つてくれる。

「川村 良太です。」

ペコリと頭を下げるだけ。無愛想な子なのだろうか？

「りょうちゃん、今日テンション低いね。」

「確かに。」

「どうかしたの？」

瑠菜や竹下姉妹が口々に言ひ。

先輩の前だとやはり、緊張するものだらうか？僕たちは、一組の中では、人数が多いほうなので、そこまで緊張はしなかつたのだが…。

「今度は、私たちが自己紹介しないと。」

藤原が楽しそうに言ひ。

「まずクラス委員長様からね～。」

木原が余計なことを言ひて、澤海さんは少しだけ、驚いたような顔をする。その後はこれといったこともなく、スムーズに進んでいった。

しかし…

「どうも、藤坂 浩太です。」

その一言を言つた瞬間、川村くんの視線が変わった。

「あなたが、落ちこぼれの藤坂家の『長男ですか？』

そう嫌味つぽく言ひ。

その瞬間、その場の空気が固まる。その空気の雰囲気を立ち切ったのは、瑠菜だった。

「あんたねー、浩にいがこれまで、どんなにいろいろ思いしたか、分かつてんの？」

「瑠菜、やめひ。」

「だつて。」

僕がそつと言つても、瑠菜は、まだ言いたげだった。

「見えないからつて、藤坂家じゃないことじやないのよ。藤坂家に恨みのある妖怪から狙われるかもしないのよ・見えない妖怪に狙われるつてどつこいつとか。」

「瑠菜。」

僕の言葉にはつとしたように瑠菜は、とまる。

「いめん。」

川村くんは、驚いたように、でも何も言えないような顔をしていた。僕は、外出するときは、ほとんど、姉さんか、家の人と一緒だった。そういうことだからだ。思春期に入るとともに、後ろで控えてくれるだけになつた。

「ミシケタゾ、カワムラノ子ヨ。」

その声にハツとして、あたりを見回すが、僕には何も見えなかつた。一瞬、黒い何かが見えた。

川村くんのほうへ向かう黒い何かと川村くんの前に立ちはだかつた。

「つづ。」

「浩太。」

近くにいたはずの木原の声が遠くに聞こえた。
この感じ、前にもどこかで…。

「浩太。」

誰かが僕の名前を呼んだ。

眼を開けば、見渡せば闇一面だった。

ふと、誰かの手が僕の頬へ触れる。

「あなたは私。」

「私はあなた。」

目の前の女性は、誰なのだろうか…。

「あなたがおりょうさん?」

聞くとほほ笑む彼女。

「二つのものは、一つになれるのかしらね?」

いたずらっぽく笑う彼女は、とても綺麗だと感じた。その面影が誰かと重なった。

「一つのモノ?」
「私とあなた。」
「え?」
「一つが一つになつた時、私とあなたも一つになれる。」
「一つに?」
「もともとは、やうならなれやおかしいんだけじね。」

哀しそうな彼女に手を伸ばす。

「もし、一つになつていたら、あなたは、つらくなつた
かもしけない。」
「一つになつていたら?」
「今から、一つになりましょ?」
「あなたと僕が?」
「そう、せしたら、彼は悲しんでくれるかしら?」

その彼とは、誰なのか?聞けりとしたけど、声にはならなかつた。

「ん？」

私は、木の上から降りる。

あのとき

春休みに感じた懐かしい気配がした。

「お前が呼ぶのなら、いつでも私は、向かうよ。」

誰に言つてもない言葉。

それは、まぎれもない私の誓いだった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4889u/>

妖怪徒然草

2011年10月9日10時28分発行